

北山城跡 第2次 (No.10)

位置情報URL：<http://www.gis.pref.mie.lg.jp/mmm/index.html?z=64&ll=35.04694907407407,136.58115536723164>

遺構検出・掘削が進行しています。



←遺構掘削を行っているところ

遺構検出が一段落すると、今度は検出した遺構を順番に掘削していきます。

写真は SH212 と名付けた竪穴住居跡を掘削している様子です。おおよそ5m四方の竪穴住居跡ですと、掘削をするのに4～8人で2～3日かかる場合があります。



←遺構の土層を確認する「あぜ」

上の写真とは異なり、SH203 と名付けた竪穴住居跡ですが、左の写真のように「あぜ」を残し、「あぜ」の土を詳細に分析します。そして竪穴住居跡が、どのように埋まったのかを確認します。

自然に埋まっていった場合は、遺構の周囲から徐々に土が流れ込み、完全に埋まってしまいうまで数十年、場合によっては数百年かかると考えられています。



←竪穴住居の時代を考える1

またまた上の写真とは異なる SH201 と名付けた竪穴住居跡です。土層の分析を終え、「あぜ」を取り外した状態ですが、「あぜ」の分析だけでは、遺構の時代を明らかにすることは困難です。

そこで、左の写真にも写っております、土器（赤枠内）のあらかず時代が非常に重要となってきます。



←堅穴住居の時代を考える2

左の写真は、堅穴住居跡（SH201）から出土した土器をアップで撮影したものです。このように堅穴住居跡からは、土器が割れた状態で出土することが多く、これらをまず観察することで、土器の時代を特定します。

土器は「時代・年代のものさし」、とも呼ばれるほど、時代を考えるためには欠かせない遺物です。その形状や特徴から時代を考え、特定します。

ただし注意しなければならないのは、遺構の中から出土しているからといって、すべての遺物がその遺構の時代をあらわすとは限りません。遺構が埋まる過程で、別の時代の遺物が混ざってしまうことも、十分に考えられるからです。

そのため、出土した遺物の場所をしっかりと確認する必要があります。堅穴住居であれば、当時の人々が生活していた床面に接して出土した遺物が最もその住居跡の時代をあらわしている可能性が高いわけです。

左の3枚の写真に写っている土器は、建物跡の床面や床面に掘り込まれた穴から出土した土器（3枚目は2枚目のアップ）で弥生時代後期の土器であることが判明しました。

そのため、この住居跡は弥生時代後期の住居跡である可能性が非常に高くなりました。

現在、北山城跡ではこうした堅穴住居跡が15棟以上確認できましたので、今後の調査の進展にご期待ください。

【問い合わせ先】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究3課 四日市整理所

〒512-8064 三重県四日市市伊坂町126-1

電話番号：059-363-3195/ファックス：059-363-3196

E-mail：maibun@pref.mie.jp

担当：勝山孝文・矢田陽・宮原佑治